

Andrei Lankov,

Crisis in North Korea: The Failure of De-Stalinization, 1956.

Honolulu: University of Hawai'i Press,
2005, xv + 274pp.

かわらじひてたけ
河原地英武

本書の主題

著者のアンドレイ・ランコフ氏は、現代朝鮮史研究を専門とする新進気鋭の学者である。1986年にレニングラード（現サンクトペテルブルク）国立大学を卒業し、89年に同大学院でPh.D.を取得した後、ロシア、韓国、北朝鮮、オーストラリアで研鑽を重ね、96年よりオーストラリア国立大学アジア朝鮮センターの講師職にある。

3年前、*From Stalin to Kim Il Sung: The Formation of North Korea 1945-1960* という研究書を著し、金日成が権力基盤を固める過程を実証的に分析したが（同書については、評者の書評[河原地2003]を参照されたい）、この新著では、1956年前後にスポットを当て、北朝鮮における非スターリン化の挫折という極めて興味深い問題に取り組んでいる。

かつてソ連のフルシチョフ首相が非スターリン化政策を行うと、それはハンガリーやポーランドなどの東欧圏だけでなく、中国にも甚大な影響を及ぼして、中ソ対立の主因となったことはよく知られている。だが、それが北朝鮮の政治にどのような衝撃を与えたのかをつまびらかにする研究は極めて少ないようだ。資料的な制約が最大の原因と思われるが、ランコフ氏は、1990年代に公開された旧ソ連の公文書を丹念に調べ、当事者たち（例えばソ連へ亡命した北朝鮮の高官など）の証言を集め、そのうえで改

めて当時の『労働新聞』をじっくりと読み込み、川床から砂金を採集するようにして貴重な事実を浮かび上がらせた。

著者によれば、1956年8月は北朝鮮の歴史のなかで特筆すべき時期となった。同月末に開かれた朝鮮労働党中央委員会全会議（以下、中央委総会と略記）で、一部の指導者が金日成を追放すべく公然たる行動に出たのだ。本書は、こうした事態に至るまでの背景を明らかにするとともに、彼らの試みが挫折し、金日成が「一国スターリン主義」へと傾斜していく過程を跡付けている。

本書の内容

本書の構成は以下のとおりである。

序 文

- 第1章 1950年代半ばの北朝鮮と指導部
- 第2章 攻撃されるソ連派
- 第3章 朝鮮労働党第3回大会
- 第4章 謀議
- 第5章 8月以前の「8月グループ」
- 第6章 8月総会
- 第7章 中ソ使節団と9月総会
- 第8章 粛清
- 第9章 北朝鮮の路線変更
- 第10章 「遊撃隊国家」の発端
- 終章 「8月グループ」はなぜ敗北したのか

第1章では、指導部内に4つの派閥が存在していたことが説明されている。すなわち、1945年以前に朝鮮において抗日戦争を展開していた闘士たちを構成員とする国内派、30年代に満洲で日本軍と戦い、40年前後にソ連極東へ逃れたパルチザン派、20年代と30年代に中国に移り、毛沢東に従って延安で行動していた延安派、45年から48年にソ連より北朝鮮へ派遣され、政治指導や教育部門の一翼を担ったソ連派（彼らは朝鮮系のソ連人だった）である。これらの4派閥が指導部内で競合していたが、パルチザン派に属する金日成は、他の派閥の排除に腐心し、朝鮮戦争の終結後にまず、最も脆弱であった国内派を

無力化した。ついでソ連派と延安派の有力な指導者を粛清し、両派の弱体化をもくろんだものの、ソ連や中国への顧慮から思い切った行動をとることはできなかった。

スターリンにならない、自らも絶対的な権力を求めている金日成は、ソ連の非スターリン化政策が北朝鮮に及ぶことを恐れた。実際、国内では金日成を「個人崇拜」する風潮を危ぶむ意見が現れていたが、なかでもソ連派に属する指導者や幹部が金日成への批判を募らせていた。第2章では、金日成が彼らソ連派をいかに政界から排除したかがつづさに記されている。ソ連派への攻撃は、1955年12月の中央委総会で公然化した。金日成は彼らのイデオロギー的立場を非難したのである。それ以後、ソ連派の主要な指導者たちが次々と弾圧され、権力を奪われた。これは同時に、金日成がソ連の影響力を排除することを意味していた。同じ時期に彼は、「チュチェ（主体）思想」を提唱するが、そこにはソ連の庇護を脱しようとの狙いがあった。

第3章では1956年4月下旬に開かれた朝鮮労働党第3回大会の意味が分析されている。ソ連からは賓客としてブレジネフ政治局員兼書記が参加し、個人崇拜の弊害に注意を喚起するスピーチを行うなど、金日成にとっては厳しい大会であった。しかし著者は、この大会で新しい中央委員が選出され、ソ連派が大幅に減少し、金日成に忠実な委員が増大した点に注目し、むしろ金日成の権力基盤は強まったと考察している。

こうして磐石の重みを加えつつあった金日成体制に対し、反旗をひるがえそうとする一派があった。それはソ連派ではなく、主として延安派に属する指導者であった。1956年の夏、金日成一行がソ連東欧諸国を歴訪し、自国を50日近く留守にすると、彼らは在北朝鮮ソ連大使館とも密接に連絡をとりつつ、共同謀議を重ねていたとされる。著者は第4章でそれを裏付けるソ連公文書を紹介している。ただし、ソ連側がその謀議に加担した形跡はないし、謀議者もそれを期待したわけではなく、予め計画を伝えることによってソ連側の暗黙の了解を取り付けようという心算だったらしい。その計画とは、8月早々に予

定されていた党中央委総会において、金日成の専横を一斉に批判しようとするものだったが、いち早く危険を察知した金日成によって阻止されてしまった。

在北朝鮮ソ連大使館が本国に送信した文書をみる限り、金日成を追放しようとの計画は1955年以前にはあり得ず、また、56年8月の党中央委総会（8月総会）に決起しようと謀議されたのは（遅くとも）同年6月であったと著者は指摘する。金日成を追放した暁には、延安派のリーダーである崔昌益を最高指導者に据える予定だったともいう。8月の政変が失敗した後、多くの人々が事件の関係者として処罰されたり亡命を余儀なくされたりしたが、必ずしも彼らが皆、それに関与していたのではなかった。さらに、政変の失敗は、ソ連大使館側が金日成に謀議をリークしたためとの臆説もあったが、公開されたソ連の文書を読む範囲では、それを裏付ける事実は見出せない。中国政府が事前にこの謀議を承知しており、それを背後で支持していたのは確かなようだ。第5章は、こうしたすこぶる興味深い問題を取り扱っている。

第6章は8月総会の様子にスポットを当てている。この総会については、北朝鮮の公的な出版物や当事者の証言、研究者の著作物等で様々に説明されているものの、肝心の一次資料が非公開のため、いまだに全貌の解明には至っていない。それでも著者は、ソ連の公開文書その他に依拠しつつ、総会の雰囲気を出せるだけ具体的に伝えようと試みている。総会では尹公欽、崔昌益、朴昌玉、徐輝などのリーダーが発言に立ち、金日成を個人崇拜する風潮を批判し、幹部政策や経済政策の誤りを指摘したが、彼らは完全に孤立し、場内の罵声にさらされたという。総会后、これらの人々だけでなく、その支持者も地位を剥奪されたり党籍を奪われたりした。彼らの一部は中国やソ連へ亡命した。

「8月事件」に連座した人々が粛清されている事態を憂慮した中ソは、共同して北朝鮮の内政に介入することを決めた。両国は9月に、ミコヤンと彭徳懐を団長とする合同使節団を平壤へ派遣したのである。この使節団に関する資料は極めて乏しく、従来の研究書でもあまり触れられることはなかったが、著者

は当事者の証言に基づきつつ、第7章で興味深い事実を明かしている。合同使節団は金日成に対し肅清をやめるよう求めただけでなく、直ちに中央委総会を開き、8月総会の決定を見直すよう要請したのだった。さらに使節団は、その総会で金日成を解任する構想すら練っていたというのである。9月23日に総会（9月総会）が開かれ、「8月事件」に関与した指導者や幹部たちの名誉が回復され、これ以上肅清を行わないという方針が出された。一方、金日成の地位は保たれた。

9月総会後の数カ月間、北朝鮮では言論への統制が緩められ、本格的な「非スターリン化」へ向かうかと思われた。しかし1957年になると、再び肅清キャンペーンが全国的に展開されるようになる。それは中ソの介入によって決議された9月総会の方針を覆すことであったが、金日成はなぜそうすることができたのか。中ソによる再度の介入があるとは考えなかったのだろうか。

第8章では、国際共産主義の変化という観点からこの問いに答えようとしている。すなわち第1に、ハンガリー事件の影響である。過度の「非スターリン化」政策が社会主義の基盤を切り崩しかねないことを見て取ったソ連は、北朝鮮への対応も見直さざるを得なかったのである。第2に、中ソ間に生じつつあった対立の影響も大きい。1957年6月には中国もソ連の立場を離れ、「反右派闘争」を開始して、厳しい言論抑圧策へ転じたのであった。同年11月に毛沢東は金日成と会談し、前年の9月総会で中ソが圧力を加えたことは間違いであったと認めたという。こうして金日成は、もはや外圧を恐れることなく、自己の権力に歯向かう者を肅清できたのである。

1957年以後、北朝鮮は独自路線を歩むようになる。社会や経済に対する国家統制の強化、政敵や不満分子の肅清、国際交流の縮小、芸術や文化活動への締め付け、そして金日成の神格化といった諸特徴が際立つようになっていった。特にソ連を敵視し、その影響力を極力排除する政策がとられた。他方、1957年には「千里馬運動」と呼ばれる経済躍進運動が全国的に展開され、その成果が大々的に喧伝された。第9章では、こうした大衆動員に基づく北朝鮮の国

づくりが詳述されている。

このような路線変更と並んで、北朝鮮国家の歴史解釈も改められた。この国家の雛形は、1930年代に抗日ゲリラ戦を展開していた金日成指導下の組織にあるとされたのだ。そして、その時期から金日成が唯一の指導者であったこと、彼とともに戦った遊撃隊は外国の支援に頼らず、自力で朝鮮民族の独立を勝ち取ったことが盛んに宣伝されるようになった。こうして、その当時の遊撃隊員が政治の中枢を占めることが正当化されたのである。第10章で著者は、和田春樹東京大学名誉教授の説に拠りながら、1950年代後半に「遊撃隊国家」の基礎ができたとみている。

終章では、1956年8月の政変が失敗した原因を総括している。ハンガリーやポーランドなどの東欧諸国と異なり、民主主義の経験が乏しく、一般大衆による広範な支持が得られなかったことが一因だが、著者は、ナショナリズムの作用が東欧と北朝鮮で正反対であった点にも注意を喚起している。すなわち東欧においては、ソ連からの自立を求めるナショナリズムの高揚が政権を揺るがず民衆蜂起をもたらしたが、北朝鮮では金日成政権自体がそのナショナリズムを独占し、朝鮮民族の自立性を唱え、ソ連や中国と関係の深かった8月政変の首謀者たちを追い落とした。ナショナリズムを鼓吹された民衆や中堅幹部も、そうした首謀者たちにほとんど共感を示さなかったのである。

本書の評価

本書は主として1950年代後半の北朝鮮政治を、実証的な手法を用いて記述している。述べられていることには、歴史の書換えを迫るほどの新事実はないようだ。しかし、近年公開されたソ連の公文書を使って、当時の北朝鮮政治の内実を明らかにしようとした試みは高く評価できる。従来の研究では、資料が極めて限られているために、当事者の不確かな回想や様々な憶測を援用しつつ、北朝鮮史に分け入るほかなかったからだ。本書によって1956年8月の政変前後の内情がより具体的にみえてきた。

もっともここで用いられているソ連側の資料は、あくまでソ連高官の見方を反映させたものであって、必ずしも客観的であるとはいえない。その点については、いずれ中国や北朝鮮の公文書とつき合わせて再検討する必要がある。また、ソ連の公文書にしても、まだ部分的な公開しかなされていないという。この時期の実証的な研究は緒についたばかりといわねばなるまい。

ソ連の非スターリン化政策が北朝鮮に及ぼした影響を探ろうとする本書のアプローチも、先行研究の少ないユニークなものだ。著者はソ連東欧圏の政治に詳しい利点をフルに生かし、例えば1956年のハンガリー事件と北朝鮮の政治を比較対照させながら議論を展開している。このような比較政治学的アプローチによって、北朝鮮の政治体制は孤立した独自の現象というよりも、社会主義体制における一典型として、他の社会主義諸国と共通する分析視角で考察することが可能となろう。その意味でランコフ氏の研究は、北朝鮮史の学徒のみならず、社会主義体制の研究に携わる人々にとっても益するところが大きいと思われる。

文献リスト

<日本語文献>

- 小此木政夫・徐大肅監修 1998. 『資料 北朝鮮研究 I 政治・思想』慶應義塾大学出版会 .
- 河原地英武 2003. 「書評 Andrei Lankov, *From Stalin to Kim Il Sung: The Formation of North Korea 1945-1960*」『アジア経済』第44巻第4号(4月).
- 金学俊 2005. 『知られざる北朝鮮史(上・下)』(李英翻案・翻訳)幻冬舎文庫 .
- 徐大肅 1992. 『金日成 その思想と支配体制』(林茂訳)御茶ノ水書房 .
- 鐸木昌之 1992. 『東アジアの国家と社会 3 北朝鮮 社会主義と伝統の共鳴』東京大学出版会 .
- 和田春樹 1992. 『金日成と満州抗日戦争』平凡社 .
1998. 『北朝鮮 遊撃隊国家の現在』岩波書店 .

<英語文献>

- Lankov, Andrei 2002. *From Stalin to Kim Il Sung: The Formation of North Korea 1945-1960*. London: Hurst & Company.

(京都産業大学外国語学部教授)